
～ 年下 ～

咲原カアヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～年下～

【Nコード】

N5013F

【作者名】

咲原力アヤ

【あらすじ】

彼氏に振られたばかりの18歳の主人公。そんなある日、家に親戚の少年が訪れて来て――・・・

#1 年下

「…………ごめん…………もう別れよう——…」

あたしの返事なんか聞かないで、去って行ったあいつ。
すぐすぐムカついたけど、

それ以上に

悲しかった——…

～年下～

「…………ふああ……………」

休日の朝。

彼氏に振られたことが昨日のように思える。

もう1週間は経つていうのに……

（どこまで引きずる気だ……あたしは……）

「……もう昼近いじゃん……」

（休みの日だからって寝過ぎたなあ……）

早く着替えなきゃ……）

あたしは適当に洋服を選んで、さっさと着替えた。

2階の自分の部屋から1階の居間に降りていくと、話声が聞こえた。

（お母さんのお客さんでも来てるのかな？）

あまり足音が聞こえないようにそっと階段を降りて、居間に向かう。

居間に入るために、ドアを開けると、やっぱり親戚のおばさんとお母さんと楽しそうに話していた。

おばさんはあたしに気が付くと、

「あらあら、優ちゃん、大きくなっちゃってえ」

「休みの日だからって寝過ぎよ優。」

「……………こんにちはあ、おばさん……………」

お母さんの愚痴は無視しておばさんに挨拶する。

……………居間でテレビでも見ようと思ってたんだけど……………

邪魔になるか……………

（何してようかな……………）

あたしが居間の入口で数秒立ち止まって、考えているとき、背後からいきなり声が聞こえた。

「あ、優さんッ？」

「……………ん？」

あたしが多少びつくりしながら、後ろを振り返ると、そこには1人の少年が立っていた。

（……………誰だっけ……………？）

見たことのあるような無いような……………

こんな少年、親戚にいたっけ？

「……………あの……………」

あたしが言葉に詰まっていると、少年は勝手に話し出した。

「僕だよ。忘れちゃった？ 皋月。 押村皋月。」

「……………んー……………」

名前を言われても微妙な反応しか返せないあたし…………

なんか…………ピンと来ないんだなあ…………

あたしが記憶を呼び起こすのに熱心になっていると、居間のおばさんが口を開いた。

「優ちゃんが小学生の時に遊んでもらっただけだからねえ。優ちゃんの方は覚えてないかもしれないねえ。」

「……………小学生の時……………」

……………覚えてない……………

大体この少年は今何歳なんだ？

見た目からして、中高生なのは間違いないけど…………

小学生の頃遊んだといえば……………すごいちっちゃい子と何回か遊んだようなないような記憶はあるけれど…………

やっぱり思い出せない…………

「何だよ。優さん覚えてないの？」

少年が少しだけふくれっ面でこっちを見てくる。

茶色の瞳が大きくてなんだか可愛い。

「んー・・・ごめんねえ。よくわかんないや。」

「えー。」

不機嫌そうな顔で少年は答える。

「あ、皐月。せっかく優ちゃんの家に来たんだから、勉強教えてもらいなさいよ。優ちゃん頭良いんですって！」

「・・・勉強？」

「あーらやだ。全然そんなことないわよッ！ウチの子の成績なんて中の中なんだから！」

お母さんが照れくさそうにおばさんに言う。

「でも聖南女子に通ってるんでしょ？それだけですごいじゃない？」

「

・・・ああ・・・おば様方の会話が始まってしまった・・・

あたしと少年はポツンと居間のドアに取り残される。

数秒の沈黙で気まづくなったので、あたしはとりあえず少年に話しかけた。

「どうすんの？ホントに勉強でもする？」

あたしがそう声をかけると、少年はすぐに反応を示し、

「えっ！良いの？」

「・・・うん。大したことは教えらんないけど・・・あたしも宿題あったし・・・」

なんだこのキラキラおめめは・・・

そんなに勉強が良いの？

「やるっ！僕ちゃんとドリル持ってきたんだよ。」

「・・・そう。居間が空いてないから・・・どっか別室で・・・」

「優さんの部屋でやりたい！」

「あたしの部屋は汚いから無理！」

「大丈夫。僕の部屋も汚いから慣れてる。」

「そういう問題じゃ・・・」

「優さんの部屋ってどこ？早く行こ。」

あたしはされるがままに再び階段を上っていく。

何なんだ・・・この少年は・・・

#2 年齢

「少年・・・君は何年生なんだい？」

あたしの部屋の机に広げられたドリルを見て、少し驚いた。

「何、少年で。臯月って言ったでしょ。」

「・・・あ・・・そうか・・・臯月くん・・・何歳？」

あたしの眼がおかしくないのなら・・・

「まだ誕生日来てないから、12だよ。」

この少年は・・・中学1年生の12歳だ。

「・・・若・・・」

確かに中学生かとは思ってたけど・・・

でも3年くらいだと思っていましたよ・・・

だつて・・・背が・・・

「優さん今高校生だよね？」

「・・・うん。」

「2年？3年？」

「3年。」

「じゃあ18歳？」

「うん。」

「・・・12歳と18歳・・・

6歳も年下なわけだ。少年は。

（・・・なんだか一気に老けた気分・・・）

「君、背高い方だよな？」

あたしがそう聞くと、

「うん。学年で7番目に高い。」

・・・少年より背の高い中学1年生があと6人も存在するのか・・・

中学生おそろべし・・・

「優さんも高いでしょ？」

「まあ・・・普通かな。」

「高いよ。」

「・・・・。」

少年は器用に右手でペンを回しながら、ドリルをパラパラと捲っていく。

あたしも自分の宿題をいったん出し、少しだけ問題を解いてから、少年を見た。

少年・・・皐月クンは、決して悪い顔ではなかった。

線が細くて、瞳が茶色で、眉がクツキリしていて、色が白かった。

（きつと運動部じゃないんだな）

すごい美形とまでは行かないけれど、少年のことを好きな子は1人ではないような顔でもある。

「・・・・君、あたしが教えなくても出来るんじゃないの？」

あたしがそう問いかけたのにはわけがある。

少年はドリルの問題を一問十数秒くらいのペースでどんどん進めて

いる。

しかも黙々と問題を解いていて、あたしに一言も質問しそうにない。

「……………出来ることには出来るけど……………」

自慢か。

「でももし分からなかったとき困るじゃない。」

「まあ……………そうだけど……………」

この少年と話すとなんか疲れる。

……………微妙な受け答えしか返ってこないんだもん……………

「……………テストいつも何位くらいなの？」

宿題のプリントから目を離さずにあたしがそう聞くと、少年の方もドリルから目を離さずに答えてきた。

「……………中間は3位だった。実力テストでは2位になって、期末は6位に下がっちゃった。」

頭メチャクチャ良いんじゃないか……………

「教えるまでもないじゃない……………頭良いでしょ、十分。」

「……………でも僕は優さんと勉強したかったの。」

「何で？」

そういうこと言われると嬉しいじゃないか。

「優さんと久しぶりに会ったから。」

「あたしは覚えてないけどね・・・」

「だからさっきちょっとショックだったんだよ！」

「ああごめんねー。」

「もう・・・」

少しだけ眉間にしわを寄せて、またドリルを見つめる少年。

（可愛いなあ・・・）

と思った矢先、少年はあたしが最もショックを受ける行為に走った
- - - - -

数分くらい、2人とも黙って、頭を働かせていると、少年がいきなり口を開いた。

「ねえねえ、優さん。」

「んー？」

「あの写真って優さんの彼氏？」

「はッ!？」

壁に貼ってある一枚の写真。

その写真はまぎれもなく、あたしと彼氏がTDLに遊びに行ったときに撮ったものだっただ。

・
捨てようか捨てまいか、迷いに迷って結局あのままの状態の写真・

やっぱり捨てておけば良かった・・・

(あんなもの見つけるなよ少年!!!!)

どういう反応をしようか迷っているあたしを放って、少年は笑顔で話し始めようとする。

「そうなんだあ。優さん彼氏いるん・・・」

「別れたッ」

笑顔でへニヤへニヤと笑っている少年にあたしは怒鳴ってしまった。

数秒で我に帰る。

「・・・あ・・・」

(馬鹿じゃないの?少年に当たるなんて、ガキじゃあるまいし・・・)
)

すぐに頭の中で反省したけど、すぐには言葉に出来なくて戸惑うあたり。

少年は驚いた表情をしていて、それが何よりショックだった。

「……あの……えーと……」

何か言葉を掛けなくちゃ……とは思っけど、なんて声をかければいいのか分からなくて……

「別れちゃったの？」

少年は真顔であたしに聞いてくる。

少年はあたしより落ち着いた人間なのかもしれないな……

「……うん……」

「振ったの？」

なんで傷に塩を塗るようなことを……

「振られた。」

「へえ。意外。」

「意外じゃないよ。」

「だって優さん美人だし。振る方かと思った。」

「そんなこと言ってくれるのは臯月くんだけだよ。」

「そうかな？」

「うん。」

「嬉しい？」

「それなりに」

「えー。その反応微妙。」

「うるさい。」

「……一気に気が緩んで、少しだけあたしが涙目なのを少年は気が付いているのだろうか……」

「年下のくせに生意気なことばかり言ってる……」

「なんなんだこいつは。」

「身体からマイナスイオンでも出てるのか。」

「だから、あたしは、こんなにも少年の傍にいとホッと出来たのだろうか。」

「それとも……」

「誰かに……振られたことを、口に出して言いたかったのかな……」

（よくわかんないや。）

そのあと少年はスラスラと問題を解き続け、あたしはそんな少年を時々チラ見しながら、段々と時間は過ぎていった。

「臯月ー。そろそろ帰るわよー。」

そんなおばさんの声が聞こえたのは、PM2:18。

お昼御飯を食べて、また勉強を始めていた時だった。

「もうこんな時間だったんだ。」

少年がボソツと呟く。

少年・・・まだ勉強し足りないのか・・・

まあ家で頑張ってくれ。

「臯月ー。優ちゃんにお礼言っときなさいよー。」

1階から聞こえてくる、おばさんの声。

少年は「そうか。」と小声で言うと、あたしの方に向きなおり、

「ありがとうございました。」

とペコツと頭を下げる。

「あたし何も出来てないじゃん。別に良いって。」

少し恥ずかしくなって、あたしはすぐに言葉を返した。

そう？と少年は首をかしげながら、頭をあげる。

「臯月ー。早く降りてきなさい。」

「おばさん呼んでるよ。早く行きな。」

あたしがそういうと、少年は一瞬だけ名残惜しそうな顔をした。

(・・・気のせいかもしれないけど。)

「うん。あ、あのさ、優さん。」

「ん？」

「僕とアドレス交換して。」

「ん。良いよー。」

「ホントにッ？」

「ホントに。」

「ありがとッ。」

そうニッコリと笑う少年。

そんなにあたしのアドレスが欲しかったのか、少年。

「これね。僕のアドレス！」

あつという間に、少年はノートの切れ端に自分のメールアドレスと携帯番号を書いてあたしに渡した。

・・・これは、あたしから少年にメールしろという意味表示なのか・・・？

「・・・あ・・・うん・・・」

あたしは戸惑いながら少年から紙切れを受け取る。

すると、少年はさつさとあたしの部屋を出て行ってしまった。

階段を下る音が聞こえてくる。

「・・・・・・・・・・。」

取り残されたあたしは、何をしていいものか分からず、もらった紙切れをじつと眺めていた。

「s a t s u k i - k e n d o - 0 3 2 1 @ x x x」

ものすごく個人情報バレるアドレスだなあ・・・と思った。

そして驚いたことに少年は「剣道部」らしい。

この「k e n d o」とはたぶん「剣道」のことだろう。

．．．．．誕生日は3月21日かな．．．

まだまだじゃん。

玄関が開く音が聞こえる。

少年がおばさんと一緒に帰るのだろっ。

あたしの記憶に無い少年は、

風のように舞い込み、

風のように去って行った——．．．

#3 連絡

翌朝。

結局昨日のうちには少年にメールも電話もしなかったな・・・

なんか、するタイミングがつかめなかったというか・・・

まあ少年も他にメールする友達の1人や2人今時の中学生ならいるだろう。

「・・・メールなんていつでも良いか・・・」

今日から休日終わりだ。

(・・・学校行かなきゃ・・・)

重い頭と身体を動かして、制服に着替えた。

携帯は一応持つて行ったけど、少年にメールする気はその時も無かった。

「優、彼氏と上手くやってる？」

愛が悪気なく笑顔で聞いてくる。

「……別れた。」

「えっ？マジで？ゴメンッ」

愛はすぐに申し訳なさそうにあたしに謝る。

「別に……あいつと元からなんか合わなかったし……会った別に他の女の匂いプンプンだったし……」

「あちゃー。だから振っちゃったのかぁ。」

「ううん。振られた。」

「…………え。何でそんな男と振られるまで付き合ってたわけ？」

愛が呆れたように問いかける。

「顔。」

「ああ…………」

なるほど、とでも言うように愛は頷く。

でも、

ホントのあたしは心のどこかで「この人はあたしを一番大切に思ってくれる。」って馬鹿なことを期待してたんだ。

そんな期待があったから、ずっと振らないで我慢してたんだ。

(…………馬鹿だなあ…………)

自分で自分に呆れちゃうよ。

よくあんな男と付き合ってたもんだ…………

「ま、優ならすぐに良い男また見つかるって!」

励ますように愛は笑顔で言うけれど、しばらく彼氏はいない…………とあたしは思ってる。

…………いないわけではないか。

そこまで欲しくない、っていうくらいかな。

「愛が紹介してくれるならね。」

「何それ！。自分で見つけなさいよお。」

「分かってるってえ・・・」

・・・少年がもう少しあたしと年が近ければなあ・・・

と思ったりもしてみるけど。

12歳の子を狙うのは流石に犯罪か。

（ていうか、好みじゃないしなあ・・・）

ああいう純情そうな子はあたしの好みじゃない。

ちょっと女の子に慣れてるくらいの人が付き合いやすくて良いんだ。

って言っても、付き合ったことある人なんて数が知れてるけど。

「愛は気になってる人いるの？」

「んー・・・今はないかなあ・・・」

「んなこと言って。隠すのはダメだぞお。」

「ホントだってえ。あ、でも最近自分の好み自覚したよ。」

「どんな？」

「あたしね、年下が好きみたい。」

「へー。あたしは断然年上だなあ。」

「生意気な子も良いもんよ？」

「年下と付き合ったこともないくせによく言うわ。」

「アハハッ」

「……………今度少年でも紹介してあげようかな。」

生意気かどうかは別として、顔は悪くないし、頭も悪くないし、むしろ良いし。

「あ。」

「何？」

「ううん。何でもない。」

「……………考えてみると、少年はメチャクチャ良い条件がそろっているじゃないか。」

だとしたら、付き合ってる子がいてもおかしくないんじゃない？

・・・ていうことは、下手に紹介して、もし「僕、実は付き合ってるんだあ」ってことになったら大変じゃない？

（ああ・・・取り返しつかないことになりそう・・・）

・・・簡単に少年は紹介出来ないか・・・

（あとで聞いておこう。いや、・・・どうやって？）

メールか電話しかないじゃないか。

・・・結局少年にメールしなくちゃ、何にも少年のことを知れない・・・

昨日色々と聞いておくべきだったのかも・・・

今更悔やんでも仕方のないことだけど。

今日あたりにでも連絡してみるかな。

・・・そうしよう。

そうあたしが心に決めたときに、丁度よく授業が始まるチャイムが鳴った。

愛は自分の席に戻り、皆一斉に机の上に教科書を出し始めた。

#4 電話

その日の夜、ベッドの上に寝転がりながら少年へメールを送った。

『臯月クンって彼女いるの?』

・・・・いきなりこんなメールは変かな・・・と思ったけど、昨日あたしも聞かれたし良いか。

(聞き返してやろう。)

只今PM10:35。

・・・・中学一年生なら、まだこの時間起きてるよね?

少なくともあたしは起きてたぞ。

そんな心配は虚しく、数分で少年のメールは返ってきた。

『いないよ。ていうか、メールしてくるの遅すぎ。』

・・・・なんて生意気なメールを返してくるんだ。

あたしが勝手にアドレス渡されて、メールしてやったつのに！

『あたしにも都合があんの。』

1分もしないうちに返信。

『どんな？』

短い・・・

『勉強とか。』

そしてすぐに返信。

『それだけじゃん。』

ム力つくなあ。

『君返信するの早すぎ。』

・・・ちよつと文句を言ってみる。

遅いよりは良いんだけどね。

『だって優さんしかメールしてないし。』

・・・友達いないのか？少年は・・・

あたしだけって・・・

悲しすぎるだろ、それは。

『友達とは？』

いつもよりゆっくりの返信と思いきや、ただいつもより文章が長いだけだった。

『アドレスは知ってるけど、学校で話してるし別にメールしなくても良い。』

・・・こいつ中1のくせに冷め過ぎ。

仲良い子同士だったら、学校以外でもメールしたり電話したりしたいだろ。

そんなこと思うのって、あたしだけ？

それとも、女子と男子の感覚は違うの？

それでも違ったら何？

今時の子ってあたしの世代より冷めてるの？

『君、絶対自分からメールしないタイプでしょ。』

少し攻撃的なメールにありつつあるような・・・

と思いながらも送信。

『する時もあるよ。』

ホントかよ。

『どんな時?』

『用事のあるときに決まってるじゃん。』

やっぱり・・・

『無愛想。』

一言文句を言っただけじゃあないか、少年。

返ってきた内容は、

『優さんのケー番教えて。』

・・・何だよ?

とは言わずに、素直にあたしのケー番を送信すると、

♪♪
♪♪
♪

すぐに電話がかかってきた。

「もしもし。何?メールしてんだからわざわざ電話かけてこなくて
も良いじゃない。」

電話で聞く少年の声は実際に会って話すよりも、少しだけ低く感じ

られた。

『僕メール嫌いなんだよね。』

「あたしに言われても困る。」

『文章だけって気持ち悪くない？』

「さあ。」

『それに電話の方が絶対的に早く話が進むじゃん。』

「まあそっただけだね。でもメールの方が安いし・・・」

『何時間もかけて、くだらない文章打ち込んでる方が僕にとっては苦痛なの。』

「皐月くん、中1っぽくない。もっと可愛く話しなよ。」

ちよつと嫌な感じか？あたし。

『それ先輩に言われたことある。』

・・・苦笑気味に返される。

「女？」

『うん。』

ちよつと悔しい気持ちが出たのは、気のせいだと思っておこう。

「・・・・・・・・・・。」

・・・あたし的には電話の方が苦手。

沈黙ってあんまり好きじゃない。

ていうか好きな人いないでしょ。

(気まずいし・・・)

『・・・・・・・・う・・・何・・・チ?』

電波が悪いようで、少年の声が途切れて聞こえてきた。

「は?」

『・・・・・・・・やっぱなんでもない。』

今度はちゃんと聞こえる。

「言い出したことは最後まで言いなさいよ。」

『どうでも良いことだから。』

「・・・・・・・・あつそ。別に良いけど・・・。」

『うん。』

少年が頷くと、再び沈黙が訪れる。

今度はあたしから口を開いた。

「今何してんの？」

『勉強。』

「好きだねえ。」

『好きじゃないよ。お母さんがうるさいだけ。』

おばさんがそんなうるさそうな人には見えないけど・・・

やっぱり外と家の中じゃ違うのか・・・

「厳しいの？」

『甘いよ。』

「なら、何で？」

『今までのテストで良い点取ったから期待されちゃってさ。』

「ああ・・・そういうこと。期待に応えてるわけだ。」

『期末ダメだったけどね。』

「何位だっけ？」

『6。』

「それでダメなんて言ったら、あたしなんてもうダメ以下だったの。」

『アハハ、そっか。』

少年の笑い声が可愛い。

と、感じてしまうのはあたしが少年よりおばさんだからなんだと思う。

『優さん。』

いきなり名前を呼ばれて驚く。

「ん？」

『お母さんに電話してるのバレそう。今日はもう切るね。』

「あ、うん？」

『じゃあね。』

「うん。」

『おやすみ。』

「…………え…………あ、うん…………おや…………あ…………切れた…………」

カッコ悪すぎ。

しばらく頭の中で反省をしていると、やがて眠気が襲ってきた。

明日になれば、少年のことなんてすぐに頭の端に追いやられるに決まってる。

ゆっくり目蓋を閉じると、もうそこから何も考えられなくなった。

#5 未練

『ごめん、もう別れよう。』

ショックは変わらなかった。

何だよ、それ。

なんであたしが振られなくちゃいけないんだよ。

ふざけんな。

．．．．．ふざけんな。

．．．．

そこであたしは現実の世界に戻る。

「……………はあっ……………」

……………。

すごい汗かいてるし……………

あたし、まだ未練タラタラなのかなあ……………こんな夢見るなんて……………

最悪だ……………馬鹿みたい……………

目ざまし時計代わりの携帯を見ると、まだAM3:47……………

(……………少年、今頃どんな夢見てるのかな……………)

なんて、変態みたいなことを考えてみたり。

「送っても返信なんて来ないよね……………」

そう思ったけど、手が勝手に動いていた。

少年と繋がっていたかった——……………何でも良いから。

……………カチカチカチ……………と、ボタンを押すたびに細やかで小さな音が周りに漏れる。

『元彼の夢見ちゃった。あたしってしつこいと思うっ?』

・・・・こんなメール、中1の男子がいきなりされても困るだろ・

(はぁ・・・朝にしないと返信来ないのわかってるのに何で送信しちゃったかなあ・・・)

自分の馬鹿さにムカついてきた。

なのに・・・

ブーブーブー

マナーモードにしていた携帯があたしの手の中で震える。

「えっ!? 嘘ッ!? 返信!?!」

・・・・少年からだよね!?

あいつ何時まで起きてんだよッ!?

『こんな夜遅くにメールしてこないでよ。マナーモードにすんの忘れてたから起きちゃったじゃん。』

「あ・・・そっか。」

迷惑だったかなあ・・・？

・・・だったよね、確実に。

でも少年がマナーモードにしないで良かったなあ、なんて思うあたしは相当性格悪いかな。

『ごめんごめん。寝てて良いよ。』

ホントはメール続けていたかったくせに。

自分に嘔吐いちゃって、大人気取りですかあたしは。

『もう目覚めちゃったよ。眠くなるまで付き合って。』

・・・ホントかよ。

少年は優しいから、無理してるんじゃないかなあ・・・

明日学校寝不足で行かないと良いけど・・・

と思いながらも、あたしは少年にメールを送信してしまう。

『元彼の夢、もうこれで3回目くらいだよ。馬鹿みたい』（＜―＞）』

・・・馬鹿みたいだよ、ホントに。

何で、あんな奴に未練なんか残しちゃうのかな・・・

やっぱり・・・馬鹿なんだね。

ごめんね少年。

『別に良いんじゃないの?』

「別に良いって・・・こっちは嫌なんだっつもの。」

少し小声で愚痴ってみる。

だって、あまりにも少年が無関心ばいことを言うから。

まあ・・・

あたしのことなんて、興味ないよね・・・

『でも見ちゃうのは嫌だよ。もう別れたんだもん。』

また付き合いたいなんて思ってないけど・・・

でも、振られたことは悔しいし、まだすごい悲しいよ。

あたしって、こんなにしつこい女だったっけ・・・?

変だよ・・・最近・・・

『他に好きな人作れば?』

・・・少年・・・

別れたばっかで、すぐに他の人好きになるっていうのは乙女にとっては大変なんだぞ？

（分かってないなあ、もう。）

『出来ないよ、そんなの。ウチ女子高だし（、旦那）』

・・・少年・・・は好きな人とか、いないのかなあ・・・

なんて考えが頭を過ぎる。

別に気になんて、少ししかなくてないけどさ・・・

『じゃあどうしようも出来ないじゃん。』

・・・呆れちゃったね、少年も。

だって、少年が考えてくれてること、尽くあたし反対してるんだもん。

『そういう皋月くんはどうなのさ・・・』

・・・ついに聞いてしまった。

ついに、って言うほどでもない気もするけど・・・

だって・・・気になったし・・・

「・・・・・・・・・・。」

・・・・・・・・？

「・・・・・・・・・・。」

・・・・・・・・あれ？

「・・・・・・・・・・。」

・・・・・・・・返信来ない？

何でいきなり来なくなっただろ・・・

・・・・・・・・あたし、もしかして、まずいこと聞いちゃった？

ブーブーブー

「あ、なんだ、来た来た。」

メールの内容を確認すると、

『ごめん、もう限界。寝るね、おやすみ。』

「はあ！？」

小声でそう叫ぶ。

．．．．絶対コレ、避けられたよね。

ていうか、拒否られた？

「．．．．むう．．．」

．．．やっぱりあたし聞かれたくないこと聞いちゃったんだ。

そうだよね、中1男子に、

『好きな人誰？』

みたいなこと聞いたら、恥ずかしくて答えられないよね。

思春期真っ盛りだもんね．．．

少年にも少年らしいところがあるじゃないか。

「．．．．．．．．。」

．．．．あたしの思考おばさんみたいかな．．．

でも、

（ホントは聞きたかったなあ．．．少年の好きな人．．．）

．．．．だって、気になるじゃん。

あんな少年ばくない少年はどんな子を好きになるのか・・・

「・・・・・・・・・・あたしも寝よ・・・」

もう4時過ぎだし・・・

明日学校で絶対居眠りしちゃうって、これじゃあ・・・

少年も・・・大丈夫かなあ・・・

優等生みたいだし、先生からも可愛がられてそう・・・

「・・・・・・・・・・」

今度は、眼を閉じてても、

少年は頭の中から消えなかった

でも、それが少し、心地よかった——・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5013f/>

～ 年下 ～

2010年11月11日08時26分発行